

「世界を舞台に活躍した外務大臣」

十二 小村 寿太郎 (一八五五—一九一一年)



みなさんは、小村寿太郎という名前を聞いたことがあるだろうか。

彼は世界が注目する中、日本とロシアとの戦争を終結するために開かれたポーツマス講和会議で見事にその任務を果たし、さらにその後、それまで日本が苦しんでいた外国との不平等条約の改正（関税自主権の回復）にも成功した明治時代の偉大な外務大臣である。

小村寿太郎は、江戸時代の終わりごろ、飢肥藩（現在の日南市）の貧しい武士の子として生まれた。

寿太郎は、七歳のころから振徳堂という藩の学校に通うようになった。振徳堂は、朝の六時に門が開き、先着順で授業を受けられるという



きまりになっていた。そこで、寿太郎は、誰だれよりも早く登校して、勉学にはげむ毎日を送った。また、おばあさんが、いつものように話してくれる昔話や歴史の中で活躍した人の話を何よりも楽しみにしており、自分もそのような人物になりたいとあこがれるのであった。

家が貧しかった寿太郎は、家計を助けるために、十二歳から「塾じゅく僕」
として勉強することになった。「塾僕」というのは、学校での勉強を無料で受けさせてもらう代りに、寮りょうに寝泊ねとまりし、朝早くから振徳堂の庭そうじや床ふきなどいろいろな仕事を、毎日欠かさずするのである。彼は、一日の大半をこのような仕事に使わなければならなかった。同じように「塾僕」として勉強する者がいたが、寿太郎より四、五歳は年上の者ばかりであった。毎日、忙しい仕事と勉強を両立させることは、とても大変なことであった。まだ十二歳で、しかも、小さいころから体が病弱だった寿太郎にとっては、なおさらのことであった。しかし、彼は、

仕事をなまけないばかりか、時間を見つけては、もくもくと勉強を続けた。そして、十五歳のとき、まれに見る優秀な成績で振徳堂を卒業することができたのである。

そのころの日本は、明治時代になったばかりであり、長い間、鎖国こくこくを続けていたため、外国との交流がほとんどなく、西洋の文明から大きく取り残されていた。寿太郎が振徳堂を卒業するころ、長崎に勉強に行っていた小倉処平おぐらしよへいという若い先生が帰ってきた。そして、「寿太郎、これからの時代は、世界に目を向けなければいけない。そして、日本の政治をもっとよくしていかなければならない。」と、西洋の進んだ学問を学ぶために長崎に留学することを勧めた。寿太郎は、その考えに強く心を引かれ、長崎に向かう決心をした。ところが、何日もかけてやっとの思いで長崎にたどり着いた小倉先生や寿太郎をはじめとする五人の留学生に、思いがけないできごとがおこった。寿太郎らが、英語などを教えてもらうことになっていたオランダ人の先生が、東京の政府に招かれて、もう長崎にはいないことが分かったのである。いっしょにやって来た年上の学生は、

どうしてよいか分からず、「どうしよう。困った、困った。」と言っているばかりであった。これには、寿太郎もすっかりまいってしまった。しかし、彼は「よし、体当りでいこう。」と考えた。そして、英語の本を自分で買ってきて勉強しては、町ですれちが



う外国人に英語で話しかけてみたり、外国人の店にいった物の値段を聞いてみたりした。このように、自分の英語が相手に分かるまで、くり返し根気よく話しかけていった。こうして、彼は、英語を自分の力で覚えていったのである。

それから、しばらくして、新しいものを学ぶ地が東京に移りつつあることを知った寿太郎は、明治時代が幕を開けて間もない東京へと向かった。そして、大学南校(現在の東京大学)に入学し、新しい時代に向けて熱心に勉強にはげみ、法律や英語の力を身につけていった。ついには、多くの学生の中から選ばれて、明治天皇の前で、自分の意見を発表するという機会を得た^えほどである。しかし、時代が大きく変わる中で、世界に目を向けていくことの重要性



イギリスで活やくする寿太郎



に気づいていた彼は、新たに学ぶべきものが、まだまだ他に数多くあることを感じていた。そして、仲間と力を合わせ、「外国に留学して日本に不足しているものを勉強しよう。」と、日本政府に自分たちの考えをまとめた手紙を送った。だが、そんな学生たちの願いなど、断られるばかりであった。しかし、いくら断られても、粘り強く願ひ出る寿太郎たちに、強い意気込みを感じた政府は、彼らを文部省第一回留学生として、外国へ留学させたのである。寿太郎は、アメリカに渡り、五年間かけて数多くのことを学んだのである。

日本にもどってきた寿太郎は、やがて外務大臣となった。

彼の残した功績は、「世界の小村」として、今でも多くの人にたたえられている。